



フレデリック・ショパン(1810~1849)Frédéric François Chopin

★舟歌 嬰へ長調 作品60 Barcarolle Fis-Dur Op.60

ヴェネツィアのゴンドラ漕ぎの歌に由来するといわれている。ショパンは船がゆったりと水面を進むイメージを表現するために、通常は8分の6拍子のものを、あえて8分の12拍子に指定した。拡張されたノクターンのような息の長いフレーズ、幻想的な転調をもっている。「舟歌」を作曲した時ショパンは36歳、ジョルジュ・サンドとの別れを翌年に控え、体調も芳しくない方向に向かい、経済的にも困窮しつつあった時期のためか、これ以降は作品数が激減していく。「舟歌」はショパン晩年期の最高傑作との呼び声も高い名曲でもある。

★ノクターン 第21番 八短調 遺作 Nocturne No.21 c moll

1938年になって草稿が発見され出版されたノクターンと言われている。作曲年代は諸説あるが、ヤン・エキエル氏の調査によると結核がかなり悪化した晩年(1847-48年)とされている。スケッチ的でシンプルな構成であるが、これぞショパンともいべき哀愁感、孤独感漂う旋律を奏でる。

★ノクターン 第20番 嬰八短調 遺作 Nocturne No.20 cis-moll

20歳前後の時期にショパンの姉ルドヴィカが彼のピアノ協奏曲第2番の練習をするために書いたと言われるように、2番の協奏曲で見られる様々な音型を引用する仕掛けもある。初版では「アダージョ」という標題がついていたが、ブラームスがこの曲を写譜する際にこの標題を消してしまった。残った速度記号の“Lento con gran espressione”のみが残り、「遅く、とても情感豊かに」という楽想指示がそのまま標題として知られるようになった。この曲の代表的な版として、パデレフスキー版・エキエル版・コルトー版・ミクリ版などがあり、各版による違いが非常に多い。映画「戦場のピアニスト」で有名になり、ヴァイオリン編曲でもよく演奏される。

★即興曲 第1番 変イ長調 作品29 Impromptu As-Dur Op.29

ショパンの場合の即興曲というのは、アドリブ的な即興演奏をするというのではなく、それまでの形式にこだわらない自由な作法による、という意味が強い。初期の作品である第1番では非常にサロン的な印象が強く、コーダで現れるコラル的な要素によって曲全体の印象を高めている。優美な曲想で二コースに「水の精が泡とともに現れる」などと評されている。

★ポロネーズ 第6番 変イ長調 作品53「英雄」 Polonaise No. 6 As-Dur Op. 53

ポロネーズは、ショパンの祖国ポーランドの貴族の間に伝わる民族舞曲で、比較的テンポの遅い威厳に満ちた格調高い3拍子の音楽。タイトルはショパンの付けたものではないが、名実ともにポロネーズの中の最高傑作として曲の内容を象徴している点では当を得ている。ほぼ1ページにわたる長い属音続きの序奏から始まり、主題があらわれると、英雄の名にふさわしいポーランドの舞曲のリズムに乗って、ポーランドを賛美する謳歌のような高潮を見せ曲を閉じる。作曲されたその時代の彼の精神的、身体的な安定感も感じさせられる。

あさい だい

★朝井 大 ピアノ Asai Dai



1999年愛知県立芸術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻首席卒業、桑原賞受賞。2002年同大学大学院音楽研究科修了と同時に渡独、ドイツ国立ドルトムント音楽大学演奏家コースを経て2005年ドイツ国立エッセン・ Folkwang 音楽大学演奏家コースを卒業、2005年10月より、2008年3月まで同大学大学院国家演奏家資格取得コースにて研鑽を積む。これまでに、河津めぐみ、松野稀一、八重口敬子、ディーナ・ヨッフエ、故ヘンリエッタ・ミルヴィス、ヴァディム・サハロフ、アルヌルフ・フォン・アルニム、ボリス・ブロッホの各氏に師事。2003年イタリア・バルレッタ市国際ピアノコンクール第1位。2004年フランス・パリ ニコライ・ルービンシュタイン国際ピアノコンクール第1位。2005年ドイツ・デュッセルドルフ ショパン追悼コンクール モンブラン特別賞受賞。2009年よりイタリア・チェルボ夏期国際音楽アカデミーの専属伴奏者を務める。ドイツ在住。今年度日本では4/24にカワイ・コンサートサロン“プーレ”でピアノリサイタル、8/6にはしらかわホールでセントラル愛知交響楽団とショパンのピアノコンチエルト演奏が決まっている。

アレクサンドロ・スカルラッチィ(1660~1725) Alessandro Scarlatti

★すみれ Le violette

元はスカルラッチィの作ったオペラ「ピロとデメトリオ」(Il Pirro e Demetrio)の中のアリアで、イタリア古典歌曲の代表作でもある。このオペラは今日上演されることはないが、このすみれのアリアは優美なうちに悲しみを含んだ歌で今も親しまれている。

アントニオ・カルダラ(1670~1736) Antonio Caldara

★つれない心 Sebben crudele

Sebben crudele「つれない人よ、たとえあなたが」というタイトルのこの曲は「愛の誠は偽りに打ち勝つ」というオペラの第1幕3場で歌われるアリア。シルヴィアを愛しているアミンタの嘆きの歌で、原曲では弦3部と通奏低音で伴奏される。

トマージョ・ジョルダニ(1730~1806) Tommaso Giordani

★愛しの君よ Caro mio ben

Caro mio benとは「いとしい女(ひと)よ」という意味で、愛する女性に対して自分のことを思ってくれるように願っている歌である。原曲は弦楽4部と独唱からなる。1782年以前にイギリスで作曲・出版された。

フランツ・ペーター・シューベルト(1797~1828) Franz Peter Schubert

★ます Die Forelle D.550

「歌曲の王」と呼ばれるシューベルトが作った、非常に人気の高い曲の一つである。ドイツ・ロマン派の詩人クリスチャン・フリートリッヒ・シューバルトの詩で、ずる賢い漁師が罾を使って魚を吊り上げるさまを歌ったもの。しかし実際には、「男はこのようにして女をたぶらかすものだから、若いお嬢さんは気をつけなさい」という寓意的な内容を含んでいる。歌曲の2年後、印象的なピアノ伴奏をつけることで、川の流れや鱒の活きいきとした姿の描写に焦点を当て、この旋律を第4楽章の主題とするピアノ五重奏曲を作った。「鱒」の愛称で親しまれるこの作品は、彼の室内楽曲の中でも傑作として知られている。

★水の上で歌えり Auf dem Wasser zu singen D.774

この作品は「ヴォーカル・オブリガート付きの舟歌(バルカローレ)」とも呼ばれるように、寄せては返す波を思わせるようなリズムを繰り返すピアノ伴奏に乗って、シューベルトに特有の美しいメロディーが歌われていく。かすかにゆれる小船の中に横たわって、この幸せの中でこのまま自分が消え去ってしまいたい(死んでしまいたい)。シューベルトの音楽の特徴の一つである幸せの中の悲しみ、死への憧れがよく表れた歌曲。長調から短調へ、短調から長調への移ろいがそれを強調する。シューベルトはこの短い歌曲の中に、人間の「生」の喜び、「死」の悲しみ、そして変わることのない「永遠への憧憬」を凝集して描きあげた。

★歌曲集『冬の旅』より「菩提樹」 Der Lindenbaum D.911-5

「冬の旅」の中でも最も有名なこの曲は、ピアノ伴奏における三連符の組み合わせによって菩提樹のざわめきをきわめて巧みに表現している。途中、風に見舞われ帽子が飛ばされるなど情景など、細部までの音楽描写も素晴らしく、イギリスのシューベルト研究家リチャード・キャベルは、「ほとんど歌えないほど美しい」と述べている。

★歌曲集『白鳥の歌』より「セレナーデ」 Ständchen D.957-4

シューベルトの歌曲全ての中で最も有名なものの一つ。恋人に対する切々たる思いを歌いあげる。セレナーデとは恋人の窓の下に立って愛を訴える歌で、この曲もセレナーデの特性に従ってギター風の伴奏を模している。情熱を内に秘めながらも優しく訴えかける甘い曲。